
赤い男

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

赤い男

【Nコード】

N2217S

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

ナポレオンの前にやって来た奇妙な赤い服の男。彼が姿を現すのは名ポロンの前だけでなく。歴史の片隅で言われている奇怪な言い伝えです。

第一章

赤い男

ある日のことだ。フランス皇帝の官邸にだ。一人の男が来た。

小柄で猫を思わせる緑の目をしており髪は茶色がかった金色である。そしてその服は。

異様な服だった。炎の様に赤い。上着もシャツもズボンも。サンキュロット、長ズボンという革命からのフランスの服であるがそれでもだ。異様と言うべき服であった。

その服を着た男がだ。こう官邸を警護する衛兵に言うのであった。「皇帝陛下はおられますな」

「待て、何の用だ」

青と白、それに髭を生やし耳にイヤリングの衛兵、まさにフランス軍人の彼がその男の今の言葉にだ。不穏なものを感じずにはいられなかった。

それで警戒を露わにしてだ。彼に問うのであった。

「何故皇帝陛下に会いたいというのだ」

「用があるからです」

「だから何の用だ」

「お話がしたいのです」

彼は穏やかだが何か含みがあるような声であった。

「だからこそです」

「だから何の様なのだ」

「皇帝陛下にこう言って頂ければいいです」

彼はここでは笑って述べてきた。

「伯爵が会いに来たと」

「伯爵だと!？」

「はい、伯爵です」

にこやかだがやはり何かがある笑みであった。

「だからこそです」

「伯爵。伯爵といつても色々だが」

「赤い伯爵と言つていいでしょうか」

今度はこう話してきた彼であった。

「それでおわかりになられると思います」

「皇帝陛下がか」

「そうです。それでは御願ひできますか」

「一体何なのだ」

衛兵には全くわからない話だった。しかしであった。

その伯爵を自称する彼を見てだ。そのうえでだった。

「確かに怪しい者だが」

「いつも言われます」

「しかし。赤い伯爵だな」

「その通りです」

「その名前を陛下にお伝えすればいいのだな」

「そうすれば会ってもらえますので」

「話は聞いた」

衛兵はここで頷いた。

「それではな」

「お伝え願えますね」

「わかった。ではな」 86

こうしてであった衛兵はまずは官邸の中に引っ込んだ。そして暫く経つてから戻つてきてだ。こうその自称伯爵に対して答えたのだつた。

「信じられないがだ」

「御会いして頂けるというのですね」

「そうだ」

その通りだとだ。彼は答えた。

「皇帝陛下直々にな」

「そうなる筈です」

「何故そう言える」

衛兵の顔はまさにいぶかしむものだった。

「皇帝陛下だぞ」

「皇帝陛下だからです」

「そうだとするのである。」

「ナポレオンⅡボナパルト殿だからです」

「わからん。しかしだ」

「はい、案内して頂けますね」

「こつちだ」

衛兵は彼を官邸の中に案内していく。官邸は宮殿でもあった。彼はその中を進みながらだ。こつ衛兵に対して語るのであった。

「思えばです」

「今度は何だ」

「あの頃は」

「思い出すような言葉であった。」

「あの方も違いました」

「あの頃とは何だ」

「先導する衛兵はここでもいぶかしむ顔で彼に問うた。」

「一体何時のことだ」

「皇帝陛下がエジプトにおられた時です」

「その時のことだというのである。」

「その時代ですが」

「随分古い話だな」

「古いですか」

「私がまだ軍に入る前、いやまだ子供だったか」

「そうですね。もうそれだけになりますか」

「そうだ。そんな前の話だ」

「そこまで古い話だというのだ。少なくとも衛兵にとってはそうであつた。」

第二章

「そんな頃の話か」

「左様です」

「エジプトにおられた時とは」

「そうです。まあとにかくです」

「皇帝陛下は会われる」

それは間違いないというのだ。

「ではな」

「はい、それでは」

こうして皇帝の執務室に案内される。するとだ。彼がいた。

小柄で軍服も妙にだぶついて見える。身体は全体に丸い感じだ。

少なくとも筋肉質ではない。

額は広く髪が薄くなってきた。顔自体もあまり男性的ではない。やはり女性的な感じだ。青い目は何処か眠そうである。その彼こそがだ。

「陛下、お邪魔しました」

男は彼を陛下と呼んだ。即ちこの男こそフランス皇帝ナポレオンⅡボナパルトであった。軍神とさえ謳われ欧州を席卷した男である。だが目の前のその英雄はだ。今はだ。

英雄には見えなかった。赤い服のその男をだ。神経質そうに見ていた。

そうしてその神経質なものになった顔でだ。彼にこう問うのであった。

「早かったな」

「私がここに参上したことがですか」

「そうだ、早かったな」

今度はこう彼に言ったのであった。

「思ったよりな」

「それは陛下が思われたよりもでしょうか」
「そうだ」

まさにその通りだと答えるナポレオンであった。

「まさか今とはな」

「今ではありません」

男はそれは否定した。今部屋にいるのは二人だけである。その為かナポレオンは少なくとも本音を出していた。彼の本音をである。

「その時はです」

「しかし来たではないか」

ナポレオンはこう男に返した。

「実際にだ」

「それはその通りです」

「それはそのまま私の運命がだ」

ナポレオンは言い続ける。明らかに普段の彼ではなかった。

「決まったということだな」

「はい、それもまたその通りです」

「それを告げに来たのだな」

「陛下、お言葉ですが」

男はナポレオンとは対象的に落ち着いていた。

「何事も終わりがありません」

「私にもだな」

「はい、人にもまた」

「それですか。来たのか」

「そういうことです」

「では私はどうなる」

ナポレオンは項垂れる顔で彼に問うた。

「これから」

「戦いに負け続け」

「この私がか」

「はい、敗れ続けます」

そうなるというのであった。

「寂しく。孤島で死にます」

「フランスでは死ねないのか」

「残念なことだとは思いますが」

「そうか、わかった」

ナポレオンは唇を噛みながら述べた。

「私はそうなるのだな」

「はい、しかし」

「しかしだと」

「貴方はまだいいです」

「私はいいいのか」

「後世に英雄として語り継がれます」

そうなるというのだ。彼はだ。

「これから出る二人とは違いです」

「それを見てきたのだな」

「はい、私は見えてきました」

「そうか。私は英雄としてか」

「永遠に語り継がれます」

「ではそれを慰めとしよう」

ナポレオンはいささか気を取り直した顔で言った。

第三章

「話はわかった」

「運命を受け入れられますね」

「それを変えることはできるか」

「できないことはありません」

それはできるといふのだ。一応はだ。

「ですがそれはです」

「私が英雄でなくなるといふことだな」

「誰にも告げずこの宮殿を去り」

まずはだ。そうしろといふのであった。

「何処かで。隠者として暮らされることです」

「それ以外にはないのだな」

「はい、どちらにしてもこの宮殿を去ることになります」

「フランスもだな」

「この国にいては見つかってしまいますので」

それでだといふのである。

「諦めて下さい」

「では同じだな」

「結果は」

「私はフランスで死にたかった」

ナポレオンは苦い、これ以上はないまでに苦い顔で述べた。

「それが望みだったが」

「それもまた運命です」

「ではその運命に従おう」

「はい、それでは」

「わかった。よく伝えてくれた」

こうその赤い男に告げた。

「ではな」

「それでは」

男はナポレオンに対して一礼してそのうえでだ。何処かに消えた。衛兵達も彼が何処に消えたのか全くわからなかった。ただ彼等の皇帝が項垂れている、普段とは全く違う姿だけを見た。これ以降ナポレオンは敗北を続け遂にはセント＝ヘレナ島で死んでしまう。それが彼の運命であった。

二十世紀中期。欧州は戦乱の中にあつた。ナチスドイツが引き起こした戦争によつてだ。多くの命が死に多くのものが失われていた。

その中でドイツは当初の破竹の進撃から一転して破滅の坂を転がり落ちていた。各地で敗北を続け国土は爆撃により荒廃しようとしていた。ベルリンもまた連日連夜空爆を受け建物が崩壊し人々が焼かれていた。その中でだ。

地下の防空壕である。だがそこは立派なものだった。総統、即ちヒトラーがそこに籠りだ。全ての指揮にあたっていたのである。

しかしその彼についてだ。不穏な噂が囁かれていた。

「今日もか？」

「ああ、今日もだ」

「今日も仰っている」

「またな」

こうだ。彼の側近達が囁き合っていた。

「またあの男がいるとな」

「あらぬ場所を指差してか」

「仰っているのか」

「赤い服の男だ」

その男がだというのだ。

「その男が来ていると仰られているのだ」

「わからん」

側近の一人がいぶかしみながら述べた。

「何だ、赤い服の男とは」

「それはわからないがだ」

「しかしいるというのだな」

「その者が」

「そうだといいのか」

「おかしい」

誰かが言った。

「今の総統閣下はな」

「そうだな、それは」

「あまりにもだ」

そしてだ。そのヒトラーは。

この日もだった。己の部屋でだ。

険しい顔になってだ。部屋の端を指し示して言っていた。

「だから何故いるのだ」

「？閣下」

「一体誰が」

「誰が来ているのですか」

「またその男がですか」

「そうだ」

鋭い目をさらに鋭くさせていた。眼光が爛々としており何かしらの魔力さえ感じさせる。よく見れば顔付きも恐ろしいものだ。いささか滑稽に見えるチヨビ髭がなければまさに魔王の顔である。それがヒトラーであった。

第四章

その彼がだ。今部屋の端を指差して言っていたのだ。

「緑の目のだ」

その青い目を血走らせながらの言葉だ。

「赤い服の男がいてだ」

「それでなのですか」

「閣下に」

「そうだ、そこにいる」

血走った目での言葉だった。

「そしてだ。私に言うのだ」

「何とですか、それで」

「一体」

「滅びる」

こう言っているというのである。

「ドイツも私も」

「我が国も総統も」

「どちらもですか」

「それは断じてない」

ヒトラーは牙を剥く様な顔で述べた。

「絶対にだ。ドイツは勝つな」

「は、はい」

「それは」

今も上から爆撃の音と不気味な響きが来ていた。その中にあるは信じられるものではなかった。普通の神経の者ならばだ。

しかしヒトラーの言葉にはだ。誰も逆らえなかった。だから彼等はだ。彼の言葉に対して戸惑いながらも答えたのであった。

「その通りです」

「我がドイツは必ず」

「最後には勝ちます」

「そしてゲルマン民族の生存圏を確立するのだ」

ヒトラーが常に言っていることだった。彼はその為に戦いを選んだのだ。

「何としてもな」

「はい、ですから」

「その赤い男は」

「戯言だ」

忌々しげに断言するヒトラーだった。

「ドイツを。私をたばかるといふのか」

「しかしその赤い男は」

「一体」

「だからそこだ！」

ヒトラーの声が荒くなつた。それで部屋の端を指差すのであった。

「そこにいる。そして私に言うのだ」

「そこですか」

「そういえば」

彼等はここではだ。ヒトラーの言葉に合わせることにした。見えないと言えはどつなるか。ナチス「ドイツでは最早常識のことであつた。

「いますね。赤い服の男が」

「緑の目の」

「私は敗れはしない」

ヒトラーは席から立ち上がって呟くのだった。

「ドイツを。必ず」

こう言っていたのであつた。しかしであつた。

ナチス「ドイツは敗れた。ヒトラーはベルリンにおいて自決した。これが事実であつた。その赤い男の言葉通りになつたのであつた。

そしてだ。ドイツを破つたソ連でだ。こんな話が残っていた。

ソ連の独裁者スターリンが死んだ直後だ。権力を握つたフルシチ

ヨフにだ。スターリンが住んでいたその別荘にいた者達からこんな話を聞いていた。

「その話は本当か」

「はい、そうです」

「その通りです」

彼等は真剣な顔でフルシチヨフに話すのだった。

「書記長が亡くなられる直前にでる」

「来たのです」

「その男が」

「赤い服か」

フルシチヨフはその話を聞きながら怪訝な顔になった。

「赤い服とズボンでか」

「はい、茶色がかった金髪で」

「目は緑でした」

「赤は我が国の色だ」

ソ連のだ。それまさにその通りだ。

第五章

「しかし背広ではないのか」

「違いました」

「十八世紀の貴族の服でした」

それだったというのである。

「その服でした」

「その服で別荘に来たのです」

「首相は御存知ありませんか」

「その男をだな」

フルシチヨフは怪訝な顔で彼等に話した。

「私が知っているか、か」

「はい、誰なのでしょううかあれは」

「急に別荘に来ましたし」

「それを考えますと」

スターリンはまさに猜疑心の塊であった。クレムリンの奥深くに
いると言われていたが実際はそのモスクワから離れた森の中に要塞
の如き別荘を造りその中にいたのだ。そしてその別荘に來られたの
は。

「党の中でかなりの地位の方ですが」

「それなら御存知と思うのですが」

「どうなのでしょううか」

「残念だが知らない」

こう返すフルシチヨフだった。

「赤い服だな」

「はい、そうです」

「貴族の服です」

「そんな服を着ている者は党にはいない」

そっだというのである。

「貴族なぞ。この国にいる筈がない」

「そうですね。プロレタリアの国である我が国に」

「貴族なぞ」

「まずはそこがおかしい」

フルシチヨフはこう話す。

「有り得ないことだ」

「ですね。しかしです」

「実際にそうでした」

「その服で来たのです」

「しかもだ」

フルシチヨフはここでさらに言った。

「あの別荘を知っている人間はごく僅かだ」

「そうですね。書記長があそこにおられると知っていたのは」

「僅かです」

「そうはいません」

「この国において」

「私を含め僅かな人間だけだった」

スターリンの猜疑心はそこまで深かったのだ。別荘の中にしてもだ。要塞そのものであり彼はそこで孤独な生活を送っていたのである。

「私が知っている人間ばかりだ」

「はい、しかも車で来なければなりません」

「秘密の道で」

「車は動いてはいなかった」

「そうだったとだ。フルシチヨフはまた話した。

「そうしたことはなかった。

「ではあの日別荘にはですか」

「誰も来られてはいない」

「そうですね」

「そうだ。それに別荘に車は来たか」

フルシチヨフはこのことを問うた。

「実際にだ。門に来たか」

「いえ、全く」

「一台もです」

「来ませんでした」

それ自体がなかったというのである。

「扉も開きませんでしたし」

「ではやはり」

「あの時来客は」

「あつた筈がない」

フルシチヨフの今の言葉こそが真実であつた。

「間違いなくな」

「そうですね。しかもです」

「書記長の執務室にすうつと入っていったのです」

「ごく自然に」

「別荘の中も知っていたのか」

フルシチヨフはここで腕を組んだ。

「しかも書記長が何時何処におられたのか把握していたか」

「そうです。それも」

「全てです」

「わからない。全てが有り得ない話だ」

フルシチヨフのその様々なものを見てきたことを窺わせる顔が曇っていた。

第六章

「そんなことはだ」

「しかし我々はです」

「確かに見ました」

彼等もこのことは主張する。

「その赤い服の男をです」

「この目で」

「疑いはしない」

フルシチヨフもそれはしなかった。

「全員が嘘を言う筈もない」

「はい、そうです」

「それは決してありません」

「では。誰だ」

フルシチヨフはさらに言うのだった。

「その男は」

「わかりません」

「何だったのでしょうか」

「ただ。こうした話があったな」

フルシチヨフはふと思い出した顔になってだ。こう彼等に話してきた。

「フランスの話だな」

「フランスですか」

「あの国のですか」

「そうだ。嘘だとは思うが」

こう前置きしてだ。そのうえでの話だった。

「サン＝ジェルマン伯といってな」

「サン＝ジェルマン?」

「といますと?」

「ルイ十五世の頃にいたという」

十八世紀の王だ。絶世の美男子であると共にかんりの色好みでも知られていた。その愛人の一人ポンバドール夫人が政治において辣腕を振るったことも知られている。

「何でも知っていてしかも異様に器用な人物だったという」

「そうした人物がですか」

「いたのですか」

「何も食わず。ある丸薬を飲み」

そのうえでだというのだ。

「不老不死だったというな」

「不老不死。その様な非科学的な」

「完全な与太話ではありませんか」

皆それを聞いて眉を顰めさせる。ソ連は科学的共産主義の国家である。そこでは一切の信仰や現実的でないとされるものは否定されていた。その共産主義を強く信じる彼等ならば当然のことであった。しかしだ。フルシチョフはここでさらにこう言うのであった。

「だが。その男はだ」

「はい」

「どういった者だったのですか」

「常に赤い服を着ていた」

言うのはこのことだった。

「そして小柄で茶色がかった金髪で」

「そして目はですか」

「緑だったと」

「そうだったというのですね」

「そうだ。全く同じだ」

そのスターリンのところに来たという赤い服の男とである。

「まさかとは思いがな」

「確かに全く同じ姿形ですが」

「不老不死の男なぞ」

「その通りだ。だからだ」

フルシチヨフの言葉が強くなった。そうしてであった。彼はだ。咎める様な顔でだ。彼等に告げた。

「このことはだ」

「はい、一切ですネ」

「言わないと」

「忘れることだ。私もそうする」

彼自身もだというのであった。

「忘れなければ。わかるな」

「ええ、よく」

「それでは」

ソ連にはシベリアがある、そういうことだった。

こうした話もあった。そして今もだ。

とある国民のかなりの数が餓えている独裁国家の首都にだ。彼がいた。

彼は道を進む一人の兵士にだ。こう尋ねたのであった。

「申し訳ありませんが」

「何だ」

「偉大なる将軍様の宮殿はどちらでしょうか」

赤い服の男だ。彼が尋ねるのだった。

「一体どちらですか」

「貴様、どうやら」

「はい、フランスの大使です」

こう言っただ。身分証を見せる。そうしてからまた兵士に話すのだった。

「将軍様に今から御会いしたいのですが」

「わかった。それならだ」

彼は兵士に案内されその人物のところに向かうのであった。そうして何かを話した。

赤い服の男の正体は誰も知らない。だが見た者は多くいる。彼が

何者か、そして何故独裁者達の前に出るかはわからない。だが一つだけ言えることがある。彼と会った独裁者達は必ず滅んでいる。これだけは紛れもない事実だ。奇怪な事実ではある。

赤い男 完

2010・12・27

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2217s/>

赤い男

2011年4月4日21時55分発行